

3人の「カメラを持った男たち」

岩岡 巽 いわおか・たつみ 1893-1955



◎明治～大正期の実業家・梅屋庄吉が設立した映画会社、M・パテール商會で撮影技師となる。その後岩岡商會を起業して皇室行事や大相撲の撮影のほか、報道撮影において高い評価を得ていた。◎地震発生時は商會のあった下谷区(台東区)根岸にいた。直ちに周辺を撮影し、人々の喧騒や迫りくる火災などの生々しい状況をフィルムにおさめた。◎震災後は社名を東京映画社に変えて、トーキー映画の製作にも手を広げるも、昭和の戦争にともなう戦時企業統合により消滅する。現存資料が乏しい記録映画史において発掘が待たれるカメラマンである。

高坂利光 こうさか・としみつ 1904-1968



◎日活向島撮影所の撮影技師。名匠・溝口健二監督のデビュー作『愛に甦へる日』(1923年)の撮影を担当した。日活時代の撮影作品は現存していないが、退社後の作品に『轟沈 印度洋潜水艦作戦記録』(1944年)が残されている。戦後は主にニュース映画のカメラマンとして活躍した。◎震災当日は劇映画を撮影していたが、助手の伊佐山三郎と共に被災地に急行。浅草、日本橋、銀座、日比谷を撮影。9月4日に撮影済みのフィルムを抱え鉄道を乗り継いで、7日に日活京都撮影所で現像、その日の夕方に新京極帝国館で封切り上映。大きな話題となる。

白井 茂 しろい・しげる 1899-1984



◎日本の文化・記録映画界を代表するカメラマン。松竹キネマ研究所、東京シネマ商會、日本映画社に所属しながら『南京—戦線後方記録映画』(1938年)、『信濃風土記より 小林一茶』(1941年・監督亀井文夫)など、記録映画史上重要な作品を撮影した。著作に『カメラと人生—白井茂回顧録—』がある。◎地震発生時は埼玉県熊谷にいて、9月2日からユニバーサルカメラで撮影を開始。命がけて被災現場を奔走して、撮影を行った。撮影フィルムは文部省が買い取り、その後の復旧作業などの様子も撮影し『關東大震大火實況』(1923年)として同年10月に公開。

インタビュー ◆出演順

渡邊 登 国立映画アーカイブ技術職員	白井泰二 白井茂の息子
とちぎあきら 国立映画アーカイブ特定研究員	川畑省子 川畑キクの孫
小宮求茜 岩岡巽の孫	田中傑 都市史・災害史研究家
芦澤明子 映画撮影監督	柳田慎也 テレビ岩手釜石支局カメラマン
高坂定男 高坂利光の息子	

製作スタッフ

製作……………村山英世
脚本・演出…井上実
演出助手…細矢知里
撮影……………藤原千史・中井正義・今野聖輝
録音……………西島房宏
照明……………野本敏郎
音楽……………清水健太郎
グレーディング・DCP…村石誠
録音……………黒澤道雄
語り……………土井美加
書……………小宮求茜
……………他

協力

国立映画アーカイブ
桜映画社
神戸映画資料館
日本大学芸術学部映画学科
東京消防庁 消防防災資料センター(消防博物館)
テレビ岩手
都立横網町公園
安井喜雄
東京大学大学院情報学環
記録映画アーカイブプロジェクト
……………他



宣伝デザイン | 桜井雄一郎

こんな時に
撮影してんのかよ!



『大正十二年九月一日 帝都大震災大火災 大惨状』(1923年)
国立映画アーカイブ所蔵、関東大震災映像デジタルアーカイブより
京橋端で映画撮影を行っているカメラマン

関東大震災——

倒壊した帝都東京を記録した映像が残されている。

猛火に追われ大混乱のさなかに

この映像は誰が撮影したのか、

音もない、モノクロームの記録フィルムが、

世紀を越えて今、語り始める。

— 関東大震災を撮る —

ドキュメンタリー映画(81分)
カメラマンも持った
男たち

関東大震災を撮ったカメラマンとそのフィルムの物語



東京市火災動態地図
岩岡巽が撮影したルートを示す。青ピンが9月1日、緑ピンが2日

1923年9月1日午前11時58分。マグニチュード7.9の巨大地震が東京、神奈川を中心とする関東地方を襲った。激震は建物を倒壊させ、木造家屋が密集する地域は火災により焦土と化した。10万人を超える死者を出した関東大震災である。

当時、記録映画は〈出来ごと写真〉〈実況〉と呼ばれ速報性・真実性が追求される新しいメディアだった。カメラマンたちはその担い手として被災地に向かった。

現在、手記や回顧録、遺族たちの証言などによって震災直後を撮影したカメラマンは3人判明している。岩岡商會の岩岡巽。日活向島撮影所撮影技師の高坂利光。東京シネマ商會の白井茂だ。

3人は誰に命令されたわけでもなく、夢中で手回しカメラをまわした。逃げさまよう避難者からは“こんな時に撮影して

んのかよ!”という罵倒や暴力にもあった。映像からは惨状とともに、この災害を残さねばという彼らの強い使命感が伝わってくる。3人が撮影したフィルムは複製され、バラバラに構成されて全国の映画館や集会場で公開された。そのフィルムのいくつかは世紀を越えて現代に残り、デジタルアーカイブ化が行われている。アーカイブは、自然災害が多発する日本で生活する私たちに、被害のすさまじさを伝える記録として、今も生き続けているのだ。

重いカメラと三脚を持って、カメラマンは被災地をさまよいながら何をみたのか。撮ったものはどのような映像だったのか。そして残されたフィルムから何を知ることができるのか。

関東大震災を撮ったカメラマンとそのフィルムが今、私たちに語りかけてくる。



下谷区 9月1日 午後1時頃



鶯谷駅から上野駅方向 9月2日 午前9時前

モに「関東大震災の時関西より列車の屋根の上に乗し、災害の様を写し米国等へ輸出」とあることから、このカメラを持って上京し、被災地を撮影したと考えられる。

映画の製作にあたり、このカメラを整備し、現在流通しているフィルムを装填して震災100年後の東京を撮影した。フィルムの規格が映画誕生から変わっていないからこそ可能だった。

震災フィルムはどこにあった

関東大震災を記録したフィルムは現在確認できるものとして20数本ある。発見された場所は寺や神社が目立った。今回使用したフィルムの履歴をみると、白井茂が撮影した“文部省版”といわれる『関東大震災火災実況』は茨城県土浦市の神龍寺に保存されていた。同寺主宰の社会教化団体による地域活動の一環として上映されていたと推測され、活動弁士の解説台本も残されていた。

文部省版の前に編集された東京シネマ版『大正十二年九月一日 帝都大震災火災大惨状』(1923年)は都内大田区の千束八幡神社にあった。文部省版に無いカットも含まれている。

高坂利光が撮影した日活版『関東大震災実況』(1923年)は山形県上山市の元映画館の試写室で見つかった。茨城県つくば市の元映画館の蔵にも日活版があった。以前は震災の日に映画館で上映していたという。

岩岡巽版の『想ひ起す帝都の大震災 岩岡商會撮影』(1925年)は岩岡家から練馬区に寄贈されていた。

撮影場所、日時の特定制業

まず、画面の中に目印となるものを探す。道路に路面電車の軌道があればその時点で場所は限られるし、丘が写っていれば上野か九段が愛宕山、といった具合に最初に撮影



全てのカットを並べて撮影日時と場所の特定作業

された地域を大きく絞りこむ。会社や店名が判読できる看板が写っていれば、昔の電話帳や社史、業界誌、会社のパンフレット類などにあたることで撮影地点をさらに絞りこめる。撮影地点とカメラの向きを特定できれば、フィルムに写った人物や建物の影の向きに着目することで撮影時刻を推定することや、関東大震災時の火災がどのように延焼していったのかを描いた「東京市火災動態地図」と照合すれば、撮影日時の推定に矛盾がないかを確認することもできる。

関東大震災時の日本の映画界

大正時代は明治時代に日本に入ってきた映画やレコードといった新しいメディアが大きく成長した時代だった。大正元年(1912)に、横田商會、吉澤商店、福寶堂、M・パター商會の4つの会社が合併し、日本活動写真株式会社(日活)が創立。映画は〈活動写

真〉と呼ばれ庶民の娯楽として急速に人気を博した。東京浅草六区、京都新京極には映画館が集まり国内外の新作が封切られ状況を呈した。

当時の映画は音のない〈無声映画〉だったが、プリントに彩色が施されたり、上映は生演奏や弁士による解説や声真似とあわせて行われていた。

映画界に初めて尾上松之助というスターが誕生し、映画雑誌も次々に創刊された。現在も発行されている『キネマ旬報』もそのひとつである。映画は劇映画だけでなく、現在のドキュメンタリー作品の源流となる教育映画やニュース映画、レコード人気に便乗した小唄映画、演劇の中に映画を組み込んだ連鎖劇などに裾野を広げていった。

フィルムアーカイブの意義

映画フィルムは、わたしたちの歴史と生活を動画で記録したものの。アーカイブされたフィルムから我々は歴史を学び新たな発見をすることができる。そのために、フィルムを網羅的に収集し、安全に保管し、写された内容をテキスト化して、将来の人々が利用できるようにするのがアーカイブの意義である。記録がなければわたしたちは事実を確かめることもできないし、過去の成功や失敗から学ぶ手立てを失う。フィルムアーカイブはわたしたちの文化遺産の一部として欠くことのできないものである。

この映画は国立映画アーカイブをはじめ、複数のフィルム保管・所蔵先から震災フィルムの使用許諾をうけ、構成した。



100年前のカメラで現在の浅草六区を撮影した映像

震災カメラの発見

映画に登場する〈ユニバーサルカメラ〉はアメリカ製の手回しカメラで、映画黎明期の主力カメラのひとつだった。

震災カメラは京都の現像所にあったと言われる。それをコレクターが入手し神戸映画資料館に渡った。カメラケースに“H・M”とイニシャルがある。この刻印から『大正拾貳年九月一日 猛火と屍の東京を踏みて』(1923年)を撮影したハヤカワ芸術映画製作所の撮影技師、見ノ木秀吉が使用したカメラと思われる。カメラケース内に残されたメ



国立映画アーカイブ相模原分館フィルム検査室
フィルムは検査されたのち、地下の収蔵庫に入れられる



低温・低湿で管理された保存庫内
約50万巻のフィルムを収蔵できる